

早稲田大学大学院 総合研究機構  
社会的養育研究所

養育者支援プログラムの活用促進  
2024年度 報告書

2025（令和7）年8月



早稲田大学

## 目次

|   |    |
|---|----|
| 1. 背景・目的 .....                          | 2  |
| 2. 実施内容 .....                           | 3  |
| (1) 養育者支援プログラム連絡協議会の運営 .....            | 3  |
| (2) 養育者支援プログラムガイドの作成 .....              | 3  |
| (3) 大型集合住宅での養育者支援プログラムの実施と調査研究.....     | 3  |
| (4) 児童思春期精神科病棟での養育者支援プログラムの実施と調査研究..... | 3  |
| 3. 調査研究 .....                           | 4  |
| (1) 問題と目的.....                          | 4  |
| (2) 方法.....                             | 4  |
| (3) 倫理的配慮.....                          | 5  |
| (4) 結果.....                             | 5  |
| (5) 考察.....                             | 10 |

# 養育者支援プログラムの活用促進

## 1. 背景・目的

2016年に改正された児童福祉法では家庭養育優先原則が明記され、翌年に厚生労働省「新たな社会的養育の在り方に関する検討会」において、「新しい社会的養育ビジョン」が取りまとめられ、親子を分離せずケアを行う在宅での社会的養育としての支援の構築について言及がなされている。

社会的養育の在り方として予防的な取組の重要性は再認識されており、パーマネンシー保障においても実親子関係による養育継続に向けた親子関係構築支援の重要性が増している。我が国では養育者支援において、特に要支援児童の養育者に対してペアレントトレーニング等の養育者支援プログラムが奏功することが知られており、これらのプログラムが予防的支援としても期待されている。一方で、実際に予防的アプローチとして養育者支援プログラムを実施し、その効果や支援のあり方等を整理した研究は少なく、この観点での知見収集が急がれる。そこで当研究所では、以下3つのプロジェクトを進めてきた。

- ① 理化学研究所（現所属：東京科学大学）の黒田公美先生のチームから引き継いだ、養育者支援を実施する支援者や有識者が集う「養育者支援プログラム連絡協議会」の運営をおこない、地域でより良い実践展開ができるよう、必要な評価も含めてサポートする。
- ② 子育て世帯の多い大型集合住宅での自治会活動において養育者支援プログラムを実施し、その効果検討をおこなう中で、従来の子育て困難世帯になってから支援をおこなうのではなく、子育て困難世帯となる前の幅広い世帯に向けた予防的支援の在り方を明らかにする。
- ③ 児童精神科医療につながる子ども・養育者は、様々な危機を抱えている。とりわけ、養育者が育児不安や育児困難感を抱えている場合や、子どもが愛着（アタッチメント）に課題を抱えている場合、障害を有する場合においては、子どもと養育者の関係性を良好にするための治療的・教育的支援が求められる。本プロジェクトでは、児童思春期精神科に通院・入院する子どもと養育者を対象に、養育者支援プログラムを実施し、この効果を検証する。

## 2. 実施内容

### (1) 養育者支援プログラム連絡協議会の運営

以下の日程で、養育者支援プログラム連絡協議会を実施した。第1回は対面とオンラインのハイブリット開催、第2回はオンライン開催とした。

| 回数・日時   | 内容   |
|---|--|
| 第1回<br>9月14日(土) 10:30-12:30<br>対面・オンライン開催     | ・近況報告<br>・以下の支援プログラムについて、各プログラム担当者よりプログラム紹介<br>(トリプルP, Circle of Security 安心感の輪子育てプログラム (COSP), MY TREE, AF-CBT, TF-CBT, セーフケア, CARE, PCIT, フレンズ, くまのこプログラム, ラップアラウンド) |
| 第2回<br>2025年3月8日(土)<br>10:00-12:00<br>オンライン開催 | ・近況報告<br>・古川恵美先生よりペアレント・トレーニングプログラムのご紹介<br>・養育者支援プログラムガイド 完成報告   |

### (2) 養育者支援プログラムガイドの作成

養育者(おやこ)支援プログラム連絡協議会の会員に各プログラムに関する説明文書の執筆を依頼し、自治体、民間機関、専門職に向けた『養育者(おやこ)支援プログラムガイド』を発行した。発行したプログラムガイドは全国の関係機関に郵送するとともに、研究所ホームページ(以下URL)でPDFを公開した。

<https://waseda-ricsc.jp/news/activities/771/>

(早稲田大学社会的養育研究所 『養育者(おやこ)支援プログラムガイド』(PDF))

### (3) 大型集合住宅での養育者支援プログラムの実施と調査研究

地域支援の一環として、すべての子育て世帯を対象としたプログラム実施し、ポピュレーションアプローチとして養育者支援プログラムを導入することの有効性を検討するために調査を実施した。調査結果は「3. 調査研究」に記載した。

### (4) 児童思春期精神科病棟での養育者支援プログラムの実施と調査研究

医療機関と早稲田大学において共同研究契約を交わし、児童思春期精神科の外来・入院患者と家族を対象に養育者支援プログラム(PCIT, MBT-C)を実施した。また、ターゲットアプローチとして、養育者支援プログラムを導入することの有効性を検討するために、患者家族を対象に調査を実施した。調査結果は別稿にて報告予定である。

### 3. 調査研究

---

#### (1) 問題と目的

社会的養育の在り方として予防的な視点は重要であり、パーマネンシー保障の観点からも、実親子関係による養育継続に向けた親子関係構築支援を欠かすことはできない。こうした予防的取組の1つとして、令和6年4月より、市町村において「親子関係形成支援事業」が始動した。事業の目的は「講義やグループワーク、ロールプレイ等を通じて、児童の心身の発達の状況等に応じた情報の提供、相談及び助言を実施するとともに、同じ悩みや不安を抱える保護者同士が相互に悩みや不安を相談・共有し、情報の交換ができる場を設ける等その他の必要な支援を行うことにより、親子間における適切な関係性の構築を図ること」である。わが国ではこれまで、ペアレント・トレーニング等の養育者支援プログラム（以下、プログラム）で同様の取組がなされており、多くの実践において、養育者の養育スキルの向上や抑うつ状態の改善等の効果が報告され、親子関係構築における予防的支援としても期待されている。一方で、実際に予防的アプローチとしてプログラムを実施し、その効果や支援のあり方などを整理した研究は少ない。

そこで本研究では、地域支援の一環としてすべての子育て世帯を対象としたプログラムを実施し、その効果について検討することを目的とした。

#### (2) 方法

##### 対象

\*\*\*\*（団体名） 正会員

##### 時期

2024年12月14日

##### 手続き

エリアマネジメント（地域における良好な環境や地域の価値を維持・向上させるための、住民・事業主・地権者等による主体的な取り組み）の一環として企画された約90分のペアレンティングプログラム（CAREプログラム）に参加した親に対して、プログラム前後と3週間後に以下の内容の質問紙調査を実施した。プログラム前後の質問紙はその場で配付、回収した。3週間後の調査はwebアンケートにて実施した。

・実施前の調査内容：基本情報（性別、年齢、職業、家族構成、子どもの年齢、世帯年収、最終学歴、居住自治体、\*\*\*\*（団体名）の認知度・活動への賛同、保育サービスの利用希望、有効な広報ツール）、プログラム受講の目的、抑うつ評価のためのPatient Health Questionnaire 日本語版（以下、PHQ-9）、育児ストレス評価のためのPSI-SF PSI 育児ストレスインデックスショートフォーム（以下、PSI）、孤独感評価のためのUCLA 孤独感尺度、地域コミットメント評価のための地域コミットメント尺度（以下、CCS）、社会的孤立を評価するLubben Social Network Scale 短縮版（以下、LSNS-6）

- ・実施後の調査内容：プログラムの満足度，プログラム受講の感想
- ・3週間後の調査内容プログラム受講が日々の子育てなどの生活に与えた影響，PHQ-9，PSI，UCLA 孤独感尺度，CCS，LSNS-6

分析は，調査項目に対して，基本情報の単純集計を実施した。統計解析には SPSS ver. 28 を用いた。

\*今回はデータ数が少ないため統計解析を実施していないが，データ数が増えてきたら PHQ-9，PSI，UCLA 孤独感尺度，CCS，LSNS-6 の実施前と3週間後の合計得点差の検定（対応サンプルによる Wilcoxon の符号付き順位検定）をおこないたい。

### （3）倫理的配慮

プログラムの案内文において，任意で質問紙調査を実施する旨を記載した。プログラムに参加した対象者に対しては，口頭及び文書により研究への参加は任意であり，参加者の自由な意思が尊重されること，研究に参加しないことによって不利益な対応を受けることはないことなどを説明し，同意書に署名いただいた方のみを調査対象とした。

なお，本研究は早稲田大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 2024-354）。

### （4）結果

#### 基本情報

参加者は男性1名，女性6名の合計7名であり，30代2名，40代5名であった。学歴は高卒1名，大卒6名であった。職業は会社員4名，専業主婦2名，パート・アルバイト1名であった。家族構成はすべての参加者が夫婦と子ども世帯であり，子どもは就学前6名，小学生4名であった。世帯年収は700～799万円1名，800～899万3名，900万以上2名，未回答1名であった。

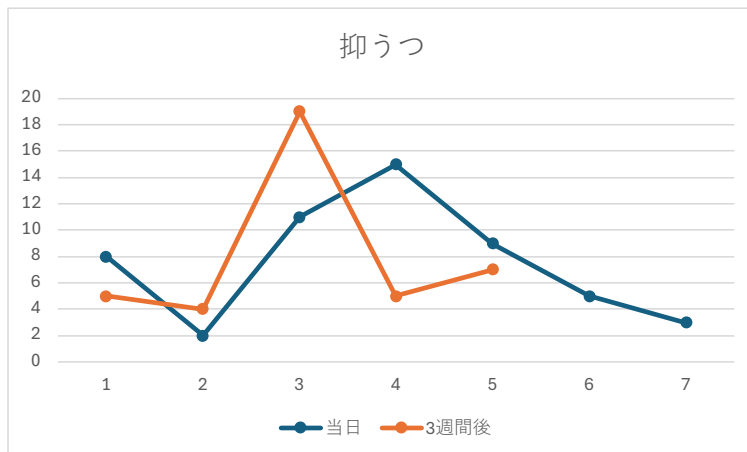
居住地はA市4名，B市3名であった。\*\*\*\*（団体名）の活動について，「知っている」は6名，「活動は知っている」は1名であった。活動については，「賛同する」5名，「どちらかといえば賛同する」2名であった。プログラム中の託児については，「利用したい」6名，「利用したくない」1名であった。広告媒体については，HP4名，Facebook0名，X（旧twitter）0名，LINE3名，チラシ投函4名，メール1名，その他（Instagram，）2名であった。

#### 受講目的

参加者の受講目的は，「子育てに対する不安や心配があったため」2名，「内容に関心があったため」1名，「子育てに関する知見を勉強するため」2名，「その他」1名（妻についてきた）であった。

### 抑うつ尺度得点の変化

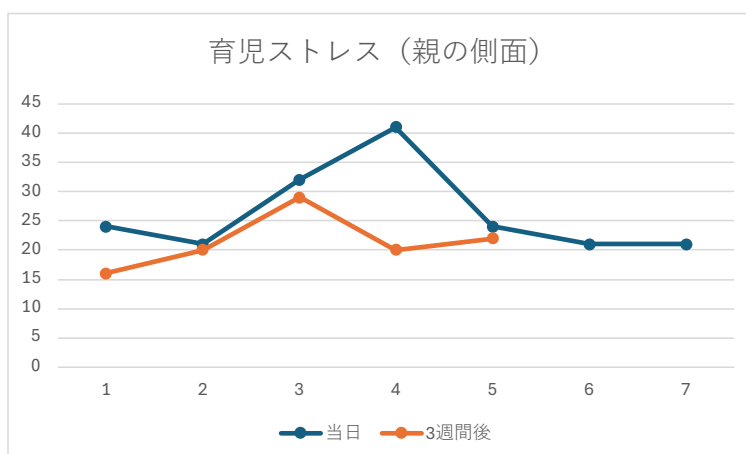
PHQ-9 の実施前の合計得点は、平均 7.57 (SD=4.61, N=7) , 3 週間後の合計得点は 8.00 (SD=6.24, N=5) であった。



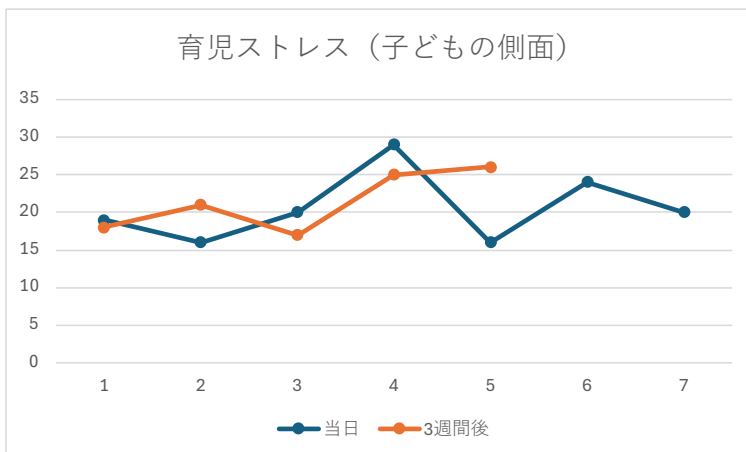
\*縦軸は点数, 横軸は ID 番号

### 育児ストレス尺度得点の変化

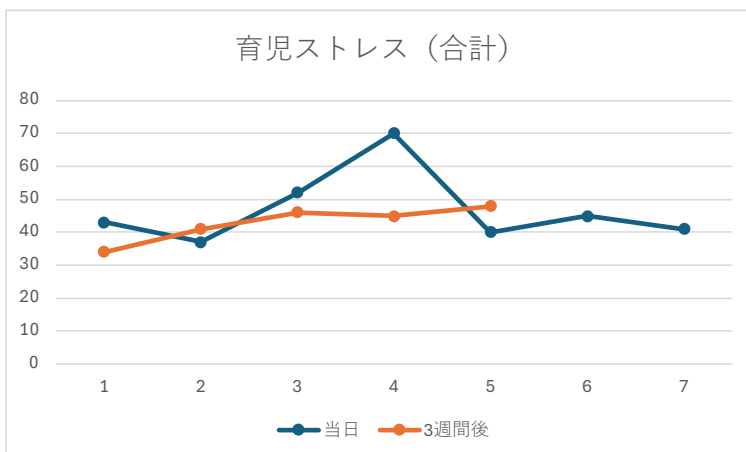
PSI の実施前の合計得点は、親の側面が平均 26.29 (SD=7.57, N=7) , 子どもの側面が平均 20.57 (SD=4.61, N=7) , 合計得点が平均 46.86 (SD=11.25, N=7) であった。3 週間後は、親の側面が平均 21.40 (SD=4.77, N=5) , 子どもの側面が平均 21.40 (SD=4.04, N=5) , の合計得点は 42.80 (SD=5.54, N=5) であった。



\*縦軸は点数, 横軸は ID 番号



\*縦軸は点数，横軸は ID 番号

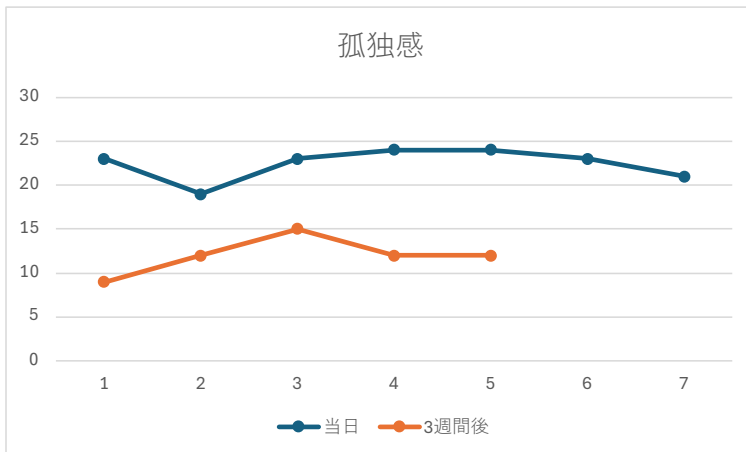


\*縦軸は点数，横軸は ID 番号

### 孤独感尺度得点の変化

UCLA 孤独感尺度の実施前の合計得点は平均 22.43 (SD=1.81, N=7) , 3 週間後の合計得点は 12.00 (SD=2.12, N=5) であった。

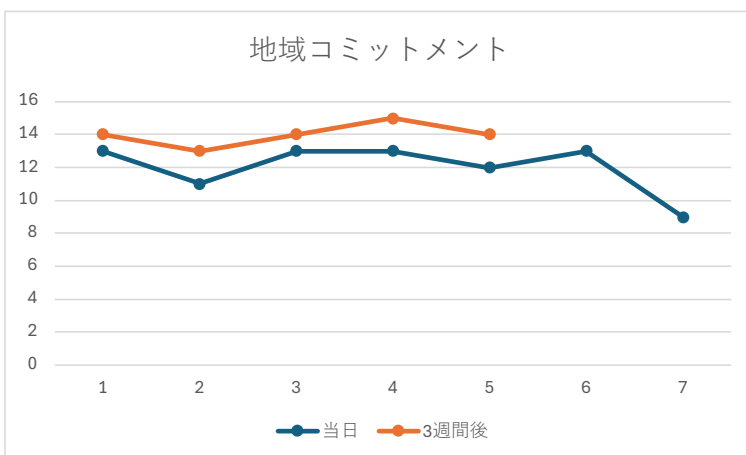




\*縦軸は点数, 横軸は ID 番号

#### 地域コミットメント尺度得点の変化

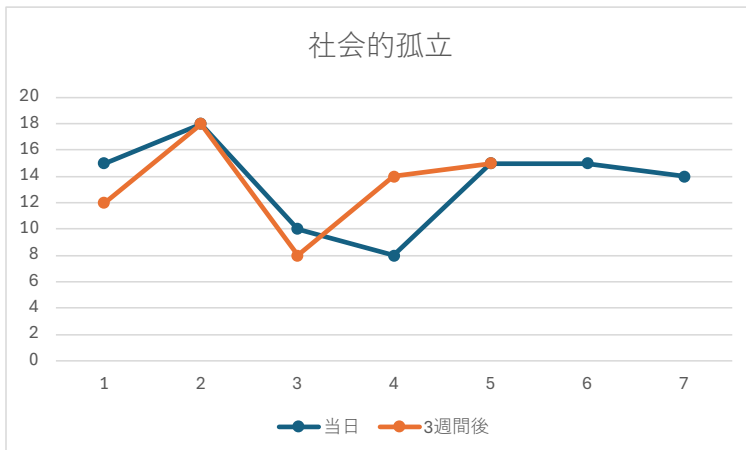
CCS の実施前の合計得点は平均 12.00 (SD=1.52, N=7) , 3 週間後の合計得点は 14.00 (SD=0.70, N=5) であった。



\*縦軸は点数, 横軸は ID 番号

#### 社会的孤立尺度得点の変化

LSNS-6 の実施前の合計得点は平均 13.57 (SD=3.41, N=7) , 3 週間後の合計得点は 13.40 (SD=3.71, N=5) であった。



\*縦軸は点数，横軸は ID 番号

### 受講の感想（原文ママ）

- こどもが小学校に上がる前は，今日学んだことに気を付けていたのですが（親が先回りで指示をしない，命令口調にならない様にするなど），最近は忘れかけてしまっていた所があったので，今後は気を付けて娘に接していきたいと思いました。友だち関係もこれから難しくなっていく年齢なので，今まで以上に悩みを話してもらえる親子でいたいです。
- 今回のイベントでお話を聞いて，今まで自分ができていた事，できていなかった事を考えることができた。日々過ごしていると主観的になりがちなので，ポイントポイントで見直す時間を設けたい。
- 親がイライラしないことも大事だと思った。よくほめている方だと思ったが，もう少し具体的に言おうと思った。
- 子どもの主体の会話をするヒントがつかまっており，日々の中で活用できたら．．．と思いました。貴重な時間をありがとうございました。親になる前にロールプレイも含めて，こういう学習の機会があるといいとも思いました。高校生とか？意外に？親子関係のあり方については学ぶ機会がないと感じるので，これからの皆さんの活動に期待しております！
- 子育てのヒントになるお話が聞けて，参考になりました。託児つきなのが非常にありがたかったです。よい企画をありがとうございました。
- 今日はありがとうございました。普段の子育てで取り入れてみようと，具体的な内容がきけて良かったです。これを，日常的にとり入れるには意識して使うことが必要だと思います。忙しい日々の中で，どれだけ実践できるか…という不安もありますが，まずはできることを1つ1つ守っていきたいと思います。子育てというと，親と子の関わりではありますが，それをこういったプログラムを通して変えてみることでより良い気

づきになると思うので、まずはやってみようと思いました。お忙しい、ありがとうございました。

- 日常生活で使えるようなヒントを沢山いただきました。毎日数分間だけでも意識することで、子どもとの良好な関係づくりができればと思いました。参考になりそうな書籍やHPがありましたら教えていただけると嬉しいです。今日はありがとうございました。

### 受講の影響

3週間後の影響では、「まあよい影響があった」4名、「特に影響はなかった」1名であった。

### **(5) 考察**

参加者は、30～40代の育児に対する関心や課題意識の高い子育て世代であり、学歴は高く、中～高所得層が中心であった。育児に対する不安だけでなく、学びへの意欲も参加の動機となっていたことは、本取り組みが予防的介入として有用であったことを示唆する。また、託児に対するニーズが高かったことから、育児中の参加者にとって、物理的・心理的な参加障壁を低減する工夫の重要性が示唆された。

心理的指標の変化については、抑うつ指標に関して個人差が大きく、効果が参加者の一部に限定された可能性がある。一方、育児ストレス指標では「親の側面」における平均得点が減少しており、親自身のストレス軽減に一定の効果があったと考えられる。孤独感指標については顕著な改善がみられ、グループ形式での実施による参加者同士の交流や共感が、孤独感の解消に有効であった可能性が示唆される。しかし、地域コミットメント尺度や社会的孤立尺度には大きな変化が見られず、単回実施による効果の限界が示唆された。このことから、継続的な関係構築が今後の課題であるといえる。

受講後の感想では、具体的な育児のヒントや気づきに関する言及が多く、日常の育児に直結するテーマが参加者の関心を引き、プログラムの実用性が前向きに評価されていた。また、受講後の影響として、一定のポジティブな主観的变化が実感されていた。託児へのニーズや実用的な内容への評価が高かったことから、今後は参加しやすい環境づくりと、日常生活に活かせる学びの提供が重要であると考えられる。

以上

---

早稲田大学大学院 総合研究機構  
社会的養育研究所

養育者支援プログラムの活用促進  
2024年度 報告書

2025（令和7）年8月

---

Supported by  日本 THE NIPPON  
財団 FOUNDATION